

高貴の姫君よ、憐れなるものを、救ひたまへや、

女皇はつくくど御覽になりまいて、可愛とうであるが、生憎今人形を購めたので、金子はなし、困つたとであるど、御心配になりましたが、如何ともせん方がございませんで、

氣の毒だが

ど、御断りになりましたので、貧人は世にも失望したらん如く、立ち去らんとしますと、女皇は急に氣づきたまひし如く、

御待ち、御待ち、今わけますから、

と云ひすてたまひ、最前の人形屋にと戻りたまひ、買ひ戻せよと仰せられました、人形屋では、不思議に思ひました、大切の御得意さまでございませすから、快よく金子を、御返しいたしますと、女皇は御喜びなされ、直ぐ貧人に、そのまゝ御興へになりました。(未完)

ローランド夫人 (ついで)

鄭越生補譯

幸にして、ギロンド黨の勢力漸く強く、一千七百九十二年の春、同黨員の多數により、新内閣の組織せらるゝに及び、ローランド氏、入りて内務大臣となる。當時人々唯家を懐ひ、公德地を掃つて求むべからず、賄賂公に行はれ、苞苴夜る門に忍ぶ、百官悉く公盜、僚屬悉く汚吏、一世を擧げて、銅臭紛々たるの時、氏の如き、公正廉潔なる國士を得て、閣臣に列す、新内閣のために、大に喜ばざるべからず。

然れども、莊嚴傲慢を以て、歐洲に名高きルイ十六世王の佛蘭西宮室、今や俄に此の一野人を迎へんとす、滿廷の驚異抑々幾何ぞ、昔者平忠盛昇殿を許されて舉朝側目反齒しき、地を異にし、風を同じくせずといへども、事實に於ては一なるべし。

今日は新閣臣が、始めての新見日なればとて、恭しく出で退へける式部官等は、遙に畧帽を冠し紐靴を穿ち、一見禮に嫻ぼざる野人の如く、見苦しくも、参内せんとするものあるを見て、何人なれば斯くは宮中を汚したてまつるぞと、誰呵しけるに、見苦しき人平然として軽く曰く内務大臣ローランド……式部官等相顧みて呆然なす處を知らざりしと傳ふ。

かくて氏の就職するや、厪精國務に任じ、治績大に見るべきものあり、是れ氏の勤勉と天才とによるは勿論なれども、然れども氏よりも一層伶俐卓見なる夫人の助言、與かりて大に力を深へしは事實なるべし。

當時夫人の勢力は、誠に偉大にして、雷に其良人を助けて、政務に奏功せしめたりしのみならず、廣く天下の政客に對し、感化を與へたりしこと少なからず、夫人常に一小室を劃して、自己の客室となし、終日天下

の政客を送迎し堂々として國家の經綸を論じ、嘗て倦む處を知らず

是より先き、十六世帝の施政、大に宜しきを得ざるものあり、黨人の怨望ますます甚だしく、是に至り危機漸く王の一身に迫らんとす、ギロンド黨人、大に之を憂ひ、王に與ふるに、反省の材料を以てし、之によりて危機を豫防せしめんとす即ち、ローランド氏筆をふるひ、侃々として施政の不可なる所以を論じ、さて曰く王にして、もし反省する處なくんば、必ずや危害の王に及ぶものあらんと。

幸に、王にして斷然意見を改め、此莊重なる苦諫を嘉納し玉ひしならば、正に來らんとする危害は、恐らく王の身邊を襲はざりしならんに、王の明是を之れ察するに足らず、竟に黨人をして、佛國革命史の上にひしる世界人道史の上に、千載塗沫すべからざる汚點

を印せしむるに至らしめたるは、かへすくも遺憾の極みなり、而して氏の建白書の進達せられたるは、實に一千七百九十二年六月十一日、氏が辭職の急命に接したるも、また此日なり、嗚呼王の頑冥不靈なる、畢竟濟度すべからざりしなり、

かくて事はいよ／＼六ツかしくなり行き、月を越へて八月十日、慘劇の序幕遂に開始せられぬ、王のテムブル獄に下されたるは、實に此十日といふ凶日にてありけるなり、是より先き、王は外國に逃れんとし、捕へられて、チユイレリー宮に禁錮せられしが、此時チユイレリー宮、亦暴民の襲ふところとなりたれば、王窘迫、逃れて議院に入り、保護を乞ふ、議會は即ち王に宣告するに、王權停止を以てし、テムブル獄に下したるなり、是に於て佛蘭西の政體全く一變して共和政體となり、共和黨聯合内閣組織せられ、ローランド氏

再び入りて閣員に列す。

斯くの如く、共和黨の希望全く達せられたれば、國民漸く堵に安んせんとし、ギロンド黨、亦漸く諸種人權の振張を實現せしめ、以て革命の實果を收めんとし着々として施政に専ららんとす、然るに山嶽黨人はこゝに鋒鏑を偃するを欲せず、憤然として、ギロンド黨に反し、激烈不穩なる決議を、ジャコピン俱樂部に結び、ジャコピン俱樂部は彼等の集會密議する處なり。

満都唯々聞寂、弦月青く西方地平線下に落ちんとすこの時にあたり、布片以て孤燈を蔽ひ、朦朧たる暗中、人影四五、或は六七、一脚の卓子を圍みて、首を鳩め低く且つ低く、云々し、復た云々するものあり、是を之れジャコピン俱樂部密會の光景となす、眼光閃々、口角深く裂け、一見人をして、股票せしめんとするは

恐らくロベスピエールなるべし、眉を蹙めて、頭を眩に支へ、沈思之を久しくするものは、恐らくダントンなるべし、議する處抑々何事ぞ。

ギロンド黨、全力を盡して、其過激なるを戒しめ、頻りに中和を試みたれども、行はれず、加之議會の勢力次第に山嶽黨に吸収せられ、竟に多數を制せらるゝに及び、また如何ともする能はざるに至りぬ、斯くの如くして我謂九月の殺戮に到達す。

九月の殺戮……吾人今是を筆にするだに、なほ醒風机邊を襲はんとす……ほゞ、世に慘刻なるは又どあるべからざるべし、生民の命を墜したるもの、幾何といふを知らず、血は流れて川をなし、骨は積りて山をなす、晝暗く鬼啾々

山嶽黨人の狂や、いよく出で、いよく狂、翌一

千七百九十三年正月二十一日、王を以て佛蘭西共和國

の公敵となし、竟に死刑に處す。

是に至り、ローランド氏は、時局の救ふべからざるを看破し、越へて一日、内閣を辭す、こゝに於てギロンドの勢力全く地に落ち、再び收拾すべからず、嗚呼竟に終局の勝利は山嶽黨の手に歸したるなり。

此時ローランド夫人、書をその親交ある知人に寄せて曰く「吾等の生命は、ロベスピエールのナイフの下にあり」革命に對する余の主張は全く破れたる」云々、夫人の憤慨想ふべし。

(未完)

かれ果て、月も宿らぬ柳かな